

森のちやれんがニュース

2021 夏

Newsletter vol.24



総合展示では、期間限定のクローズアップ展示に注目！

北海道博物館の総合展示には、2～4か月で入れ替わるクローズアップ展示のコーナーがあります。その年の特別展にちなんだ展示、新しく収集した資料の紹介や学芸員の最近の研究にもとづいた展示など、博物館のタイムリーな活動を垣間見ることができます。また、照明などによる展示中の劣化を防ぐため展示できる期間が限られる貴重な資料がクローズアップ展示でお披露目されることも。

4月16日には、「く歩く宝石」北海道

のオサムシ」(写真)など、7つのクローズアップ展示が一挙に新しくなりました。8月13日には、第7回特別展「あっちこっち湿地」(会期：7月10日～9月20日)に関連した4つのクローズアップ展示がはじまります。

現在公開中のクローズアップ展示や



次回予告については、ウェブサイトをご覧ください。

(学芸員 渋谷美月)

CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
冬の遊びの定番？「子供用の櫓」
- ③ 総合展示紹介
第1テーマ「クローズアップ展示2」をふりかえって
- ④ 研究活動紹介
つながる研究、ひろがる研究
—ウシヨロの帳簿の分析まで—
- ⑥ だれもが利用しやすい博物館を目指して
—体験用教材の開発—
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
第10回アイヌ文化巡回展を幕別町で開催しました
- ⑧ 活動ダイアリー
2021年3月～2021年5月の記録

収蔵資料紹介

冬の遊びの定番？「子供用の橇」^{そり}

尾曲 香 織

研究部生活文化研究グループ 学芸員

今回紹介する収蔵資料は、冬に使われる子供用の橇です（夏号ではありませんが…）。子供用の橇は遊具ですが、馬橇などは北国の運搬具の定番であり、かつては冬場の重要な交通手段でもありました。そのため、橇そのものだけでなく、製造用具も含めると、北海道博物館には約900点も収蔵されています。

現在でも、冬場には親が子どもを乗せたプラスチックの橇を曳く様子がよく見られますが、行きは子どもが乗り、帰りは買い物袋が載っている、ということもしばしば。橇は遊具でもあり、運搬具でもあることがよくわかります。

写真1の資料は、かつて小樽市稲穂町にあった、とある商店から寄贈していただいた橇です。この形態の橇は「文化橇」といい、大正末期から昭和初期に誕生したものです。木製で、雪の上を滑るズリ木と呼ばれる部分はすべりをよくするため、金属の板（裏金）が取り付けられています。また、橇の足には金属製の輪が取り付けられており、人が曳くために紐を取り付けていたのでしょう。座面の裏には、かつて使用したと思われる女性の名前が書かれています。

写真2の資料は厚岸町で収集した、明治時代から昭和初期にかけて普及した、先端が高い「カナ橇」と呼ばれる形態の橇です。写真3の資料は稚内市

で使用された組立式の橇です。いずれも自家製であり、写真1の資料に比べると簡素な作りですが、いずれも座面が割れていたり、板がはがれていたり、すっかり楽しめたような雰囲気があります。当館に所蔵されている子供用橇の形態は、概ねこの3つです。

ちなみに、橇を使った「雪^{すべ}り」に関する新聞記事は少なくありません。特に橇が人にぶつかる事故が問題となっていたようで、1930（昭和5）年12月25日には、「だから止めなさい 坂^{さか}のりの橇、自転車へ衝突 三人とも大けが」や「不埒な坂^{さか}のりの橇」という見出しがついた橇による人身事故が報じられています（函館新聞、2面）。これらの見出しからは、すっかりうんざりしている大人たちの顔が浮かぶような気がしませんか？ とはいえ、大怪我をした3人は14～20歳なので、橇すべりに夢中だったのは子供だけではないようです。

いつから橇による事故が問題になったかは確認中ですが、1918（大正7）年の1月31日の函館新聞の記事には、雪すべりをしても良い坂が指定されたことが報じられています。このときは函館の幸坂と弁天坂、浅利坂と公園南門坂が許可されているのですが、橇ですべることは「厳禁」とされています。

函館警察署では、子供の取り締まりに難渋したようで、見つけても子供たちが蜘蛛の子を散らすように逃げてし

まい、捕まえられないことから「橇^{そり}は家庭で取り締まって欲しい」と署員が記者にこぼしています（函館新聞昭和5年12月25日、2面）。多くの子供たちが（もしかすると大人も？）スリルを求め、目を盗んでは危険な坂に繰り出していたのでしょう。

ところで、この記事を執筆中、札幌市出身の職員から、子供の頃（平成初期）に橇の代用品として米袋を使った、という話を聞きました。彼は10kgのビニール製の米袋にすべりを良くするため綿を詰め、紐の持ち手を付けたものを使っていたそうです。小学校に上がるまではそれを持って公園に向かっていたとか。米袋もそのうち収蔵資料になるかもしれません。

さらにその職員の話で面白いのは、「きらら397」の米袋だったことをはっきりと覚えているところ。絵柄がかわいかったから、とのことで、特別な一品だったことがうかがえます。残念ながら記録されていませんが、もししたら、今回紹介した橇にもそのようなエピソードがあったのかもしれません。

モノの歴史はもちろん、ふふつと笑ったり、ちょっと目が潤んだり、そんなモノと人との思い出も残せるよう、日々情報を集めています。皆様ぜひお気軽にご連絡ください。



写真1 収蔵番号：27539、長さ65×幅31×高さ57（cm）



写真2 収蔵番号：4605、長さ72×幅37×高さ72（cm）



写真3 収蔵番号：5505、長さ63×幅31×高さ10（cm）

総合展示紹介

第1テーマ「クローズアップ展示2」をふりかえって

三浦 泰之

研究部歴史研究グループ 学芸主幹

総合展示室に7か所ある「クローズアップ展示」。通常の展示だけでは紹介しきれない話題や収蔵資料などを定期的に入れ替えて紹介しています。

第1テーマ「北海道120万年物語」の中には2か所ありますが、その内、「クローズアップ展示2」では2か月に1回ほど展示替えをして、主に江戸時代以降の北海道に関する資料を取り上げています。

過去3年間に行った展示の中から、いくつか振り返ってみたいと思います。

①「新選組の元幹部隊士 永倉新八」

(2020年4月11日～6月11日)

新選組は、幕末の京都で江戸幕府に敵対する浪士たちを取り締まった、幕府お抱えの剣客集団です。その幹部隊士の一人、永倉新八(1839～1915)は、江戸で働いていた松前藩家臣の次男として生まれ、明治維新後は松前藩の医者・杉村家の智養子となって杉村義衛と名前を変えるなど、北海道にゆかりの深い人物です。多くの幹部隊士は幕末から明治維新期の動乱のなかで命を落としましたが、永倉は、大正時代まで生き、新選組の活動を後生に語り継ぐ生き証人となりました。

そうした永倉の生涯を、ご子孫の方から寄贈いただいたゆかりの資料からふりかえりました。

なお、永倉関係資料は、当館所蔵の歴史資料の中でも人気が高く、資料の



①永倉新八着用のチョッキ（幕末期～明治時代）

保存という観点に配慮しながら、毎年、このコーナーでは取り上げています。

②「北海道の双六あれこれ」

(2018年9月15日～12月12日)

サイコロをふって、スタート地点である「ふり出し」からコマを進め、いくつかのマスをめぐり、一番早くゴールである「上がり」にたどり着いた人が勝ち…。このような遊びは、「絵双六」と呼ばれています。日本では、江戸時代おわりごろから、錦絵の流行などを背景に、さまざまな種類のものがつくられるようになり、庶民の遊びとしておなじみになりました。

そうした絵双六について、お店案内や名所などをテーマにした当館の所蔵資料を紹介しました。

③「旧松前藩士 南條家資料」

(2020年10月16日～12月16日)

松前藩士南條家は、15世紀に、北海道南部、現在の知内町にあった城館「脇本館」の館主・南條季継を初代とする家柄です。やがて蠣崎家(松前家)に仕え、江戸時代終わりごろには、中書院席200石取りの中級藩士として、主に奉行クラスの役職を務めました。

当館は、近年、南條家ゆかりの資料をご子孫の方から寄贈いただきました。南條家歴代の内、幕末維新期の当主・南條将(信敏)(1835～1910)に関わるものが中心で、文書資料、生活資料、美術資料あわせて126件からなる資料群です。

そうした南條家資料から、着用した袴・陣笠や、刀、知行宛行状といった古文書などを紹介しました。

クローズアップ展示2のコーナーでは、これからも、永倉関係資料のような「定番」に加え、ふだんは収蔵庫で大切に保管している資料、新しく寄贈された資料など、さまざまな資料を紹介していく予定です。ご期待ください。

なお、展示替えに関する最新情報は、当館ウェブサイトにてご確認をお願いします。



③南條家の家紋入りの陣笠（江戸時代）



②札幌区実業家案内双六（1903年刊）

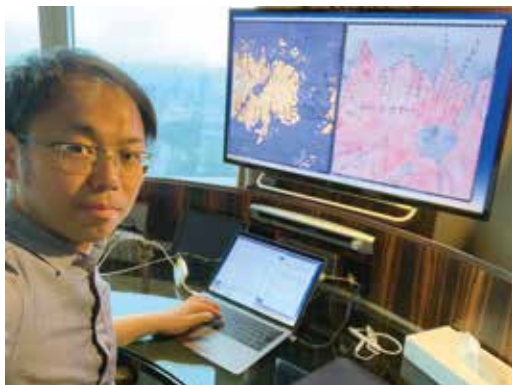
※当館ウェブサイトの「おうちミュージアム」では、実際にこの双六で遊べるコンテンツ「第7弾 120年くらい前の札幌をすごろくで体験しよう!」を公開中

研究活動紹介

つながる研究、ひろがる研究
—ウシヨロの帳簿の分析まで

東 俊 佑

研究部歴史研究グループ 学芸主査



1976年、北海道札幌市生まれ。学生・院生時代の7年半を仙台で過ごす。2003年より当館学芸員。博物館での担当分野は中・近世史（歴史）。写真は、旅行先の台湾（台中市）のホテルで古地図の研究をする私。

私は、最近、サハリン（樺太）西海岸のウシヨロという場所のアイヌの人たちが働いて稼いだ給料のことが詳しく記載されている小さな帳簿を5年かけて分析しました。「5年も」と言った方がよいのかもしれませんが。

実は、帳簿の存在は15年以上前から知っていました。だけど、当時の私は、帳簿を分析できる能力を持ち合わせてはいませんでした。

私の研究対象（問題関心）は、学生・院生のころから17～19世紀のサハリンの歴史であり、幕藩制国家（江戸幕府）の枠外と位置付けられた「蝦夷地」のさらに周縁部の地域の歴史から日本の歴史を見つめ直すというものです。当時の研究潮流で言えば、「北からの日本史」と「地域史」の研究ブームを掛け合わせたものとも言えるのでしょうか。

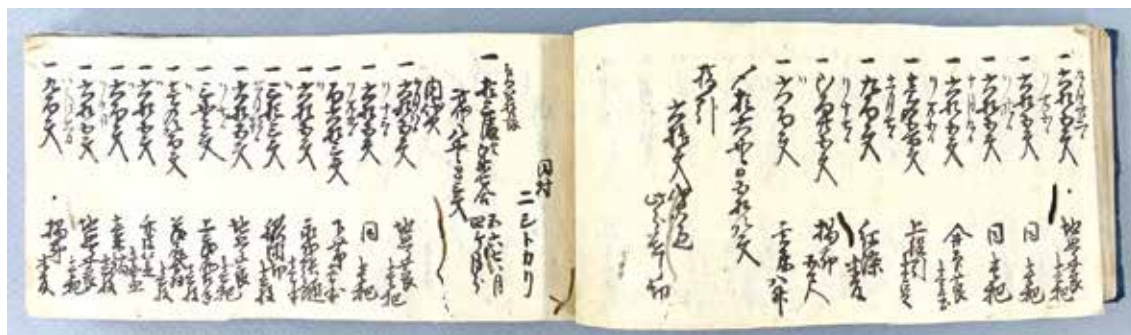
私は、2003（平成15）年に今の職場（旧

開拓記念館）に勤めてからも、サハリン（樺太）にはこだわって研究を進めてきました。本来、旧開拓記念館での私の立場は、北海道の中・近世史ですから、サハリンにも視野を広げつつ、北海道のことを中心に、さまざまな各地域のことを満遍なく取り上げて研究しなければならなかったのかもしれませんが。しかし、サハリンにはこだわってきた。なぜなら、大学時代のある日本中世史の先生の「歴史家は帰る場所（マイホーム）を作らなければならない」との言葉が強烈に頭に残っていたからです。これは、能登一国の荘園のことはすべて頭に入っていて、それがベースにあるから日本史を読み直すことができるんだ、というある高名な歴史家の事例を解説した言葉でした。核となる研究フィールドを持てという意味でしょう。だから私も、サハリンの、しかも幕末のウシヨロにこだわり

ました。幕府のアイヌ政策や越前大野藩のウシヨロ場所経営、あるいは交易に訪れた人びと（サンタン人）とアイヌとの接触の様相などの問題は、膨大に残る公的文書（箱館奉行所文書）を読めば、いろいろとわかります。けれども、場所経営下のアイヌ社会の構造はよくわからない。それを解決してくれそうな史料は、『北蝦夷地用』という小さな帳簿なのですが、その帳簿は、私の前に大きく立ちはだかった壁でした。

読めない、わからない、つまらない。分析に時間がかかる。研究に効率化を求めるなら、帳簿を使わないで、実績をあげる方が楽です。そんな時、ヨイチ場所の林家文書が当館に寄贈され、資料整理と目録作成の業務が私のもとに舞い込んできました。何とその中には、「土人勘定差引帳」、「番家仕入帳」、「浜中貸附帳」などと墨書された分厚い帳簿も数点あります。「これはすごい史料だ」と思う反面、「これ、どうやって分析すればよいのだ」という不安が頭をよぎります。

そんな折、林家の帳簿に関連して、東京大学史料編纂所の研究プロジェクトからのお誘いを受け、ロシア・サンクトペテルブルク市の東洋古籍文献研究所が所蔵するアイヌの交易帳簿2点の調査の機会をいただきました。この帳簿は、1806-07（文化3-4）年のロシア



帳簿『北蝦夷地用』 北海道大学附属図書館所蔵、旧記314

船によるサハリン島襲撃の際の接収品と考えられるもので、日本国内には類例のない最古のアイヌ交易帳簿です。2010年から12年まで足掛け3年、毎年1週間ほどの行程でペテルブルクへ通い、帳簿の調査に参加させていただきました。谷本晃久さん（北海道大学）や佐藤雄介さん（現学習院大学）と一緒に帳簿の解説を進めるうち、自分のなかでアレルギーになっていた帳簿の読み方や構造が少しずつわかってきました。

2015年4月に北海道博物館がリニューアルし、少し落ち着いてきた2016年から、意を決してウシヨロの帳簿の研究に取り組むことにしました。研究と言っても、帳簿に書かれてある品物の名前や数字をひたすらExcelに入力する地道な作業です。昔は、撮影した史料写真を紙に印刷し、それを見ながらの作業でしたが、今はそんな原始的なことをする時代ではありません。画像はクラウド上の自分のデータベースの中です。2014年ごろから、自分がよく使う文献・論文や史料、画像をクラウド化し、研究はいつでもどこでも同じ環境で進められるようにしてきました。JPEGもPDFも、放り込んでおくだけで勝手に画像中の文字をOCRしてくれ、必要な時に語句を検索すれば、簡単に検索結果を表示してくれます。今は、20年前にやりたかったことが実現できる便利な世の中です。人文系の

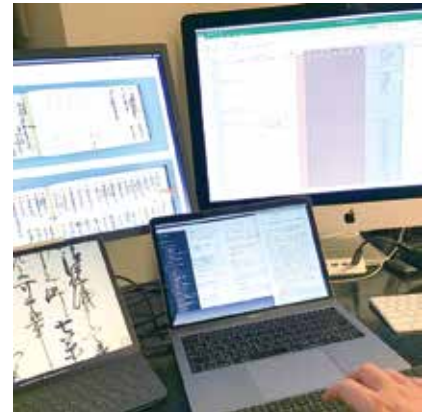


アイヌ交易帳簿の調査（写真右は谷本さん）
サンクトペテルブルク市にて、2011年

研究生活にもデジタル化の波が押し寄せています。

日々さまざまな業務が肥大化するなか、研究時間は自らの手で工夫して確保しなければなりません。学芸員の勤務時間は、種々の事務、あるいは展示・普及行事の準備や利用者対応などに費やされるので、論文執筆時期を除けば、純粋に研究などできません。したがって、ライフスタイルの見直しが必要になります。

研究は、好きだからこそやるものであり、職業研究ではありません。他人からの承認のためではなく、自分のために研究します。したがって、研究は休みの日や勤務時間終了後などにも当然行うものですが、私の場合、2014年ごろから早朝に行い、定時には退勤し、朝の続きを自宅で行うように改めました。仕事が忙しくて研究する時間がな



Evernoteを活用した自宅での研究
PC2台、外部モニター1台、iPad1台

いと文句や不満を言う人が増えているようですが、他人に文句を言う前に、研究とは何かを自己に問い、自らを改革することが必要でしょう。

こうしてライフスタイル見直しとデジタル化による効率化を図り、研究環境を整え、帳簿とそれに関連する研究材料の基盤が完成し、ようやく分析が可能となりました。

帳簿分析をして感じたことは、結果がクリアで、新しいことが必ず言えるということです。最初から結論ありきで論文を書く人もいますが、帳簿分析は、論文を書き終わるまで、結論がわかりません。頗る面倒で非効率だと思っていた帳簿分析は、実は合理的かつ効率的な研究でした。

「研究者の価値は35歳までで決まる」とか「地べたを這っていると、自分から史料を探さなくとも、そのうち史料の方が寄ってくる」などという都市伝説的な言葉を若い頃聞かされました。昔はその意味がさっぱり理解できませんでしたが、今は少しわかるようになりました。「視野が狭い」とか「謙虚に生きよ」とも言われました。時間はかかっても、謙虚に史料と向き合い、マイホームを定め、核はブレずに裾野を広げていくことで、バラバラな自分の研究は一つにつながり、ひろがることを、研究生活20年にしてしみじみと感じる今日このごろです。

* 研究成果については、『北海道博物館研究紀要』第3～6号をご覧ください。



旧樺太庁博物館時代の展示絵画（サンタン人交易図）の調査
サハリン州郷土博物館にて、2007年

だれもが利用しやすい博物館を目指して —体験用教材の開発—

田中 祐未
学芸部道民サービスグループ 学芸員

亀丸 由紀子
アイヌ民族文化研究センター 学芸員



写真1 はっけん広場 パネルとバナー設置風景



写真2 「はっけんキットの使い方」パネル

北海道博物館には、お子さまからご高齢の方、近隣の方や海外にお住まいの方など、さまざまな方が来館されます。多くの方にとって利用しやすい博物館を目指し、これまでに取り組みを行ってきました。ここでは、2020年度事業の一部をご紹介します。



「はっけんキット」を
気軽に利用できるしくみづくり

当館の「はっけん広場」(現在は感染症対策のため閉室中)には、体験学習教材「はっけんキット」が40種類以上あります。お客様が好きなキットを選んで、自由に取り出して体験できることが「はっけんキット」の特徴なの

ですが、その旨を伝える掲示が目立たず、キットを使うことをためらうお客様が時折いらっしゃいました。

その課題を解決するため、「はっけんキットの使い方」パネルと「はっけんキット」のバナーを委託制作しました(写真1～2)。目指したのは、わかりやすく、親しみやすいデザインです。パネルについて工夫した点は、①イラストだけを見てもだいたい意味が伝わるように、②易しく大きな日本語表記、③易しい英語の併記などです。バナーの方も、はっけん広場の空間全体の雰囲気に調和させつつ目を引くよう、「はっけんキット」をモチーフにしたイラストを配置したり、色使いにこだわったりして、検討を重ねました。はっけん広場再開後は、より多くの方に「はっけんキット」をご利用いただければ幸いです。



写真3 展示資料「サケの皮でつくったくつ」

総合展示室の展示資料を活用した
フットプリント制作

現在、博物館では感染症対策の一環として、チケット売り場や総合展示室内など、館内のいたるところに「足跡マーク」や距離の目安となる「2m間隔の線」を設置し、お客様に“ソーシャルディスタンス”を意識した博物館利用をお願いしています。

そのように制限が多い中でも、博物館を楽しんでもらえるよう、総合展示室内に展示されている資料から、床に設置するものだけに、資料の“足跡や足元”に注目して「フットプリント」を制作しました。例えば、第2テーマ「アイヌ文化の世界」に展示中の「サケの皮でつくったくつ(写真3)」からは、サケのウロコやヒレといった細かな点もできるだけ再現できるように工夫してフットプリントを制作しました(写真4)。ほかにも、総合展示室の展示資料を使って色々な“足跡や足元”を制作したので、今後、館内で活用していく予定です。



これからも、社会的状況の変化に柔軟に対応しつつ、さまざまな人に利用してもらえるような博物館を目指し、積極的に取り組みを行っていききたいと思います。

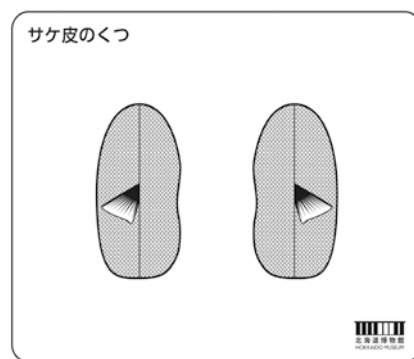


写真4 フットプリント「サケ皮のくつ」
細かいウロコやヒレのようすに注目！

アイヌ民族文化研究センターだより

第10回アイヌ文化巡回展を幕別町で開催しました

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

今年度は、幕別町教育委員会との共催で、4月29日(木・祝)から5月17日(月)までの日程で忠類ナウマン象記念館にて、北海道博物館の第10回アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く ～山田秀三の地名研究から～ 2021 幕別」を開催しました。

* * * * *

展示では、山田秀三氏の地名調査資料のなかから、1970(昭和45)年に十勝川筋のいくつもの川を調査したときの記録と、1973(昭和48)年に帯広から広尾にかけての地名を調査したときの記録を中心に、幕別町とその周辺の地域に関する資料を紹介しました。特に、山田秀三氏がナウマンゾウ発掘場所を訪れたときの写真や忠類市街の様子など、忠類にゆかりの地域や忠類以南の地域を多く選んでいます。



写真2 山田秀三氏の資料
(忠類、当縁川付近の地名調査の記録ノート
(1973年))

* * * * *

当初の予定では、忠類ナウマン象記念館での展示の後、5月21日から6月20日まで、幕別町千住の幕別町百年記念



写真1 展示の様子

ホールでも開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言に伴って幕別町立の各施設が臨時休館となったため、残念ながら、巡回展も中止となりました。

* * * * *

このような、新型コロナウイルス感染症の様子を見極めながらの日々でしたが、その中でも幕別町の皆様には忠類での展示を様々な支えていただきました。

巡回展の様子は、町の公式ツイッターのみならず、地域おこし協力隊の皆様のツイッターや、帯広のコミュニティFMの番組内でも紹介していただきました。感染防止に絶えず気を配りながら運営を支えてくださった幕別町教育委員会の皆様をはじめ、開催館や関係の皆様に、改めて感謝申し上げます。

* * * * *

幕別町百年記念ホールでの展示については、冬季に延期して開催できるよう、幕別町教育委員会の皆様と相談しているところです。関連講座も含めて、さらに充実した内容になるように準備を進めていきたいと考えています。

■第10回アイヌ文化巡回展

「アイヌ語地名を歩く ～山田秀三の地名研究から～ 2021 幕別」

会期：4月29日(木・祝)から5月17日(月)まで

会場：忠類ナウマン象記念館
(中川郡幕別町忠類白銀町381-3)



図1 巡回展ポスター

(アイヌ民族文化研究センター
研究主査 遠藤志保)

活動ダイアリー

2021年3月～2021年5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

3月6日(土)

■チャレンが古文書クラブ⑩を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

3月13日(土)

■はじめての古文書講座⑨を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

3月14日(日)

■特別企画展「北海道の恐竜」終了。



3月21日(日)

■ミュージアムカレッジ「一枚の選挙ポスターから見る、アイヌ民族と選挙の歴史」を開催。担当：小川正人。

3月25日(木)

■森のチャレンがニュース2021 春号 (Vol. 23) を刊行。

3月26日(金)

■北海道博物館研究紀要第6号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第6号を刊行。

3月27日(土)

■チャレンが古文書クラブ⑪を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

3月28日(日)

■はじめての古文書講座⑩を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

4月10日(土)

■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう」を開催。担当：水島未記・堀繁久・表溪太・自然ふれあい交流館スタッフ。



4月16日(金)

■総合展示室クローズアップ展示①～⑦を展示入替。

①描かれたアイヌ民族のサケ漁—小玉貞晨筆『蝦夷国魚場風俗図巻』(左1番下の写真)

②新選組の元幹部隊士 永倉新八



③折りの造形—音吉さんのイナウ



④新しく仲間入りしたアイヌ民族に関する資料たち



⑤岩手県から北海道へ渡った神楽



⑥おふろに行こう！



⑦〈歩く宝石〉北海道のオサムシ [1ページ参照]



4月29日(木)

■アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く」(幕別町忠類ナウマン象記念館) 開幕。(～5月17日(月))

5月1日(土)～5月31日(月)

■新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館。当館身障者用駐車場・北海道開拓の村の駐車場を閉鎖。

■チャレンが古文書クラブ⑪開催中止。

■ミュージアムカレッジ「じっくり聴こう！アイヌの音楽」開催中止。

■チャレンが古文書クラブ⑫開催中止。

■アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く」(幕別町百年記念ホール) 開催中止。

5月29日(土)

■北海道を対象とする国の緊急事態宣言延長に伴い、臨時休館期間を6月20日(日)まで延長することを決定。

人事異動

退職(3月31日付) 〈アイヌ民族文化担当副館長〉中村 亘、〈総務部総括グループ主幹〉山岸 睦、〈学芸部博物館基盤グループ兼研究部博物館研究グループ学芸主査〉杉山智昭、〈学芸部博物館基盤グループ兼研究部自然研究グループ学芸主査〉添田雄二

転出(3月31日付) 〈総務部総括グループ主査〉古野健太郎、〈総務部総括グループ主任〉徳本 彩

新任(4月1日付) 〈総務部総括グループ主事〉金子未来、〈学芸部道民サービスグループ兼研究部自然研究グループ学芸員〉久保見 幸、〈学芸部博物館基盤グループ兼アイヌ民族文化研究センター研究職員〉吉川佳見

転入(4月1日付) 〈総務部総括グループ主幹〉由水正明、〈総務部総括グループ主査〉鈴木芳彦

来館者数

○2021年3月					
総合展示室	4,415人	特別展示室	5,167人	はっけん広場	0人
○2020年度合計					
総合展示室	43,664人	特別展示室	12,563人	はっけん広場	0人
○2021年4月～5月(5月1日～5月31日臨時休館)					
総合展示室	3,060人	特別展示室	0人	はっけん広場	0人
○累計(2015年4月～2021年5月)					
総合展示室	562,557人	特別展示室	398,730人	はっけん広場	120,784人

森のチャレンがニュース 第24号

発行日：2021年6月29日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2021